

## 関係を前提とした教育行為を解明するための理解的方法の提案

——バンヴェニストにおける話（ディスクール）の概念を手がかりとして——

新妻千紘 東京学芸大学院連合学校教育学研究科言語文化系教育講座

戸田功 埼玉大学教育学部言語文化講座国語分野

キーワード：教育行為、理解的方法、バンヴェニスト、マックス・ウェーバー

### 1. はじめに

前稿<sup>1</sup>では、大村はまの主体性概念の捉え方の比較を通して、奥田正造の教育行為の解明を行った。教師と生徒の上下関係に統制された大村はまにおける主体性を受動的主体性として、また、教師と生徒の対等な関係において生じる奥田正造における主体性を相互的主体性として位置付けたが、厳密には両者は対照的な関係として捉えることができない。なぜなら、大村はまの行為は対象が誰であれ一貫性が損なわれないのに対し、奥田正造の行為は、常に、行為に関わる相手との関係に応じて変容していつてしまうためである。要するに、相互的主体性は奥田正造における主体性のあり方というよりは、奥田正造がもたらす一種の「現象」であり、奥田正造における主体性のあり方とは区別して捉えるべきであろう。そこで、本稿では、前項における「相互的主体性」を、関係に関わる相互の主体が対等な共感を得るという前稿で確認した特徴を踏まえて、「相互的主観性」と呼ぶことにしたい。

それでは、奥田正造における主体性のあり方を改めて捉え直すためにはどうすればよいのだろうか。仮に、奥田正造における主体性を大村はまと対照することで論じることができるとすれば、大村はまの行為の三つの特質、〈勤勉的蓄積性〉〈選択的一義性〉〈戦略的脚色性〉<sup>2</sup>とは対照的な特質を奥田正造が持っていると考えることができる。換言すれば、それは蓄積されることがなく、多義的で意味を限定しづらい、さらに、必ずしも行為の主体の価値観に基づく意図に還元することができないという特質を持つことを意味する。このような主体性のあり方を仮に能動的主体性と呼ぶことができるとしても、その解明が大村はまの場合と違い、かなり困難であることは容易に推察されるだろう。我々はここに、マックス・ウェーバーの議論を手がかりに構成していた理解的方法<sup>3</sup>だけでは捉え切れない対象領域を見ることができる。

さらに、厄介なことに教師と生徒の関係に基づいた解明の方法や、関係を前提とした理解の方法は、どの学問領域においても確立されていないというのが現状である。教育学や社会学の主流は、単位化され観測された事象について、統計的手法等を使って、その事象の客観的かつ普遍的側面を記述することのできる仮説を導き出そうとするものであり、むしろ、個々人やまたその間に成立しているであろう関係を前提とした行為は、「特殊」な例外として捨象することが望ましいとされる<sup>4</sup>。要するに、教職に限らずとも誰もが日常で行うような、相手に応じて対応を変えることで意図した結果をもたらそうとするという「当たり前」の行為は、結果に本質的な影響を及ぼ

す重大な要因足りうるにもかかわらず研究上は殆ど俎上にのせられることはないのが現状である。

そこで本稿では、そのような対象との関係に応じて相互的かつ流動的に変容する行為を解明するという困難な課題に対して一つの光明をもたらすと思われる先行研究として、言語学者バンヴェニストの論稿に着目することにする。言語学においては、言葉を示す概念として、言語 (langue ラング)、ことば (langage ランガージュ)、言 (parole パロール)、話 (discours ディスクール)<sup>5</sup>を使い分けるが、中でも話 (ディスクール) という概念は、相互的主観性及び関係を前提とした行為と類似した性質を持っている。バンヴェニストは話 (ディスクール)<sup>6</sup>の性質について、「離散的かつ、つねに一回限り<sup>7</sup>」「臨場的指向しかもたないものなかにおいてしか同定されえない<sup>8</sup>」「対話者相互の間のもの<sup>9</sup>」と述べており、このような話 (ディスクール) における相互的かつ流動的な性質は、言語学においても捨象されてきたという旨を指摘している。

そこで、本稿では、バンヴェニストにおける話 (ディスクール) の捉え方及びその解明の方法を明らかにすることを通して、関係を前提とし、流動的に変容していく個の行為を解明する方法を検討する手がかりを得ることにしたい。この新たな理解の方法は、マックス・ウェーバーの方法を新たに補うものとして期待することができるだろう。

## 2. バンヴェニストにおける話 (ディスクール) 概念

### 2-1 言語学の変遷における話 (ディスクール) 概念の位置づけ

まず、バンヴェニストの論稿「一般言語学の最近の傾向<sup>10</sup>」に着目し、今まで言語学において話 (ディスクール) 概念がどのように論じられてきたか、という点を中心に見てみよう。

19世紀から20世紀初頭にかけての言語学の主流は言語の起源や進化法則の探究であったが、ソシュールの議論によって、あらゆる種類の言語は同列であり言語の起源は存在しないというのが通説となった、とバンヴェニストは総括している。ソシュール以降、言語学は「ことばがそれ自身では何ら歴史的な次元をもたず、共時態であり、構造であり、そのはたらくのはもっぱら象徴的性質のみであると自覚したこと<sup>11</sup>」により、文化水準や文字の有無、最古の言語と現代の言語の比較等に基づいて言語を価値づけるというような研究は否定され、歴史的見解、哲学、心理学といった隣接の学問分野との関連の一切が、言語学から排除される傾向が生まれたという。

方法論の大幅な転換によって、言語学は価値を取り除かれたことばの「形式」そのものの抽出と分析を目指すようになったが、その科学的な「厳密さ」の過剰とも思えるほどの追究が極度に技術的であることに加えて、強調しておくべき特殊な性格がある点についてバンヴェニストは次のように指摘している。

言語分析が科学的であるためには、意義から手をひき、ただ要素の定義と分析のみに専心しなければならぬということが、ここでは原理として認められている。手続き上厳重に守らねばならぬ諸条件があるため、必然的に、この意義ないしは意味という、捉えがたい、主観的でかつ分類不可能な要素は排除せざるをえない。(中略) 上記の方法が一般化されるものとなれば、言語は、人間または文化に関する他の科学のいずれとも、全く合流できなくなるおそれが出てくる<sup>12</sup>。

言語学者の研究の対象は話（ディスコース）、すなわち《日常のことば》<sup>13</sup>であり、話（ディスコース）が意義や意味、主観性を前提に発せられているのは言及するまでもないが、それらは言語学の俎上に載せられるや否や存在しないものとして扱われてしまうということをバンヴェニストは指摘する。その上で、彼は、話（ディスコース）自体は相手や状況に応じて変容していくものであるが、言語学的にそのような状況の同定や測定、分析を行う方法は未だに存在していないと述べている。

ここからは、それを検討することが困難であるという理由から、日常に即した発話等の行為が学問的研究から排除されているという問題が、教育学や社会学だけでなく、言語学においても同様に存在することがわかる。

## 2-2 バンヴェニストにおける話（ディスコース）の研究手法

それでは、科学的な厳密さを追究する過程で意味や意義、主観性といった話（ディスコース）概念の本質的な前提条件が損なわれてしまうという問題をバンヴェニスト自身はどのように解決しようとしているだろうか。

まず、バンヴェニストは、首尾一貫した概念として捉えられてきた「意味」という概念を、記号論・意味論という二つのレベルに分けて捉えることを提案している<sup>14</sup>。「記号論」のレベルにおいては、意味があるかないかという区別だけが認識の対象となる。例えば、フランス語では、ril という語には意味がないため検討の対象とならないが、rôle は意味を持つため検討の対象となる。先に触れたような、意義や意味を検討の対象としないことばの「形式」そのものを対象とする研究は、「記号論」のレベルにおいてなされているということになる。

一方、「意味論」のレベルにおいては、「さまざまな記号の連鎖、状況への適応、相互調整の結果としての「意味」<sup>15</sup>」が論じるべき対象となる。社会生活や文化に固有の価値づけによって変容する語義や、それに基づく解釈、状況や相互の人間関係に応じて生み出される意味作用のメカニズムの解明等、意味の領域が検討の対象となるのが「意味論」である。バンヴェニストの提案は、「記号論」と「意味論」の区別を明確化することで、文化との隔絶によって成果を上げてきた従来の言語学を「記号論」の領域として限定し、主観的な意味付けや価値づけを前提とする「意味論」のレベルの言語学を新たに開拓することであると言える。

ただし、バンヴェニスト自身は、実際には「意味論」の領域を十分解明するまでには至っていなかったことも明らかである。意味や価値を前提とする「意味論」の領域の解明に当たっては心理学、社会学、人文科学との連携が必要になるだろうという点や、客観化の困難な「意味論」の開拓に当たって言語学が指導的な役割を果たすだろうというような展望をいくつか示している<sup>16</sup>ものの、そのほとんどは今後の課題として提示されるに留まっている。したがって、バンヴェニストが残した優れた諸研究においても、話（ディスコース）概念を解明する方法は依然確立していないということになる。

## 2-3 「意味論」領域の新たな研究方法の確立を目指して

そこで本稿では、話（ディスコース）という対象領域を括りだすための概念について考察し、「意味論」の開拓はどのような方法によって可能となるかについての考察を試みたい。

考察のための手がかりとしては、大まかに二点を挙げるができる。まず一つは、先に言及したようにバンヴェニストが複数の論稿において示している「意味論」の開拓のための展望であ

る。

記号論的意味と意味論的意味が二つの異なった論理をもつ概念であり、二つの異なる概念世界に属しているということは、それらが要求する有効性の基準に違いがあることにも表れている。すなわち、記号論的意味（記号）は認識されなければならない。一方、意味論的意味（ディスクール）は理解されなければならない。認識と理解の違いは、二つの心的能力の相違に由来する。その一つは過去のものとして現在のものの同一性を感知する能力であり、もう一つは新たな発話行為について、その意味を把握する能力である。（中略）この後者の領域にとっては、概念や定義のために新しい装置が必要である<sup>17</sup>。

認識を必要とする記号論に対して、理解を必要とする意味論という領域は、我々にとっては容易にマックス・ウェーバーの理解的方法を思い起こさせる。意味や価値を前提としつつも、科学的明晰さをいかに保持するかという課題は、ウェーバーが最も重要視していたものの一つである。「意味論」解明の手がかりとして、まずはウェーバーとバンヴェニストの議論の共通性を明らかにすることにしたい。

もう一つの手がかりは、バンヴェニストの複数の論稿に共通にみられる独特な性質である。例えば「動詞における人称関係の構造」「代名詞の性質」「ことばにおける主体性について」<sup>18</sup>といった諸論稿は、代名詞や主辞の機能といった記号論的な文法構造を論じながら、人称の複数化・単数化、省略といった用法が社会的・文化的な価値や階級関係と結びついていることを指摘したものである。これらはいずれも代名詞、特に人称代名詞の性質を論じたものであるが、厳密には「記号論」にも「意味論」にも分類しがたい議論であるという共通性を持っている。代名詞がどのような意味を持つかという点に触れているため意味論に属する議論であると思われる一方で、社会や文化に固有な価値づけや特定の状況・人間関係から切り離された、代名詞を所有する言語およびことば全般といった、いわば形態的特徴に焦点を絞った議論をしている。また、バンヴェニスト自身が記号論と意味論の区別については未だ個人的な見解にすぎない段階であると述べている<sup>19</sup>事実も合わせて考えると、バンヴェニストにおいても、意味論の領域の画定には未だ曖昧な部分が残されていると言うことができる。したがって、バンヴェニストがどのように意味論の領域に関わる議論を行なっているかより厳密に検討することで、意味論の研究方法を探っていく必要があると言えるだろう。

### 3. バンヴェニストにおける意味論の対象領域の確定

#### 3-1 ウェーバーとバンヴェニストにおける意味論の領域の相違

価値を前提とするマックス・ウェーバーの議論と、価値の排除を前提とするバンヴェニストの議論は、その論じている内容に大きな隔たりがあるにもかかわらず、その研究方法から興味深い共通性を見出すことができる。

ソシュールが言語は体系をなすという原理を提案した後、言語の体系を明らかにする過程で生まれた<sup>20</sup>のが構造主義<sup>21</sup>である。バンヴェニストはそのような体系を捉えるための構造を導き出すための方法的手順として、1) 有限の全体から弁別的な要素を取り出し、2) それらの要素を結

びつける法則を明らかにする、という二つを概略的に提示している<sup>22</sup>。

「弁別的な要素」とは、構造の構成において「弁別的価値をもつ」要素であり、無限に細分化することが可能な「音」の中からある特定の言語において意味のある相違を生み出す「音素」を同定する過程が、1)に相当する例として挙げられている。

不規則かつ明瞭な分割の基準を持たない全体から「弁別的な要素」を取り出し、その性質や法則を明らかにする構造主義の研究プロセスには、興味深いことに、非合理、曖昧、計算不可能とされてきた主観性を科学的研究の対象として解明することを試みた、マックス・ウェーバーの研究と極めて近い特徴を見ることができる。ウェーバーは次のように述べている。

広く一切の科学と同様、全ての理解は、「明確性」を求める。理解における明確性は、二つの種類があって、合理的なもの（これも、論理的か数学的かに分れる）か、それとも、感情移入による追体験的なもの、すなわち、エモーショナルな、芸術鑑賞的なものかである。行為の領域で合理的に明確なのは、何と言っても、行為の主観的意味連関の知的理解が完全且つ明晰に行われる部分である。行為のうち感情移入的に明確なのは、行為の体験的感情連関が完全に追体験される部分である<sup>23</sup>。

ウェーバーの述べている内容は興味深いことに、バンヴェニストにおける構造主義的方法的手順と一致している。主観性や価値を前提とした区分不可能な領域からウェーバーが見出した「弁別的な要素」とは、合理的な、あるいは感情移入による追体験が完全に行われる「主観的意味連関」である。「主観的意味連関」とは、新妻・戸田(2019)<sup>24</sup>において既に確認したことであるが、研究対象である行為の目的と、その目的に対して取られた手段の連関を指している。換言すると、ウェーバーは「目的」「手段」といった構成要素を取り出し、「主観的意味連関」「体験的感情連関」といった概念によって構成要素同士の関係について、それを捉えるための理論的枠組み＝「構造」を導き出しているということである。このように、両者の研究には、そのプロセスにおいて共通した方法意識、バンヴェニストの言うところの「構造主義」に基づく方法論に依拠した研究を行っていると言うことができるであろう。

興味深いことに、バンヴェニストは「フロイトの発見におけることばの機能についての考察<sup>25</sup>」において、フロイトの精神分析が話（ディスクール）を用いてなされる点に着目し、患者の《話》（ディスクール）を通してしか知り得ない《現象》について次のように述べている。

《現象》は動機づけの連関によって支配されていて、ここではこの連関が、自然科学において因果関係の連関として定義されているものに代わる地位を占めるのである。精神分析学者たちがこの見解を認めるならば、独自の特殊性をもつ彼らの学問の科学としての地位と、彼らの方法の特定の性格とが、いっそうよく確立されることになろうと思われる<sup>26</sup>。

客観的事実の如何とは関わりなく、患者の主観性を通して生じた《現象》を「動機づけの連関」から理解しながら、科学的研究としての明晰さを損なわないという手法は、まさしくウェーバーの理解の方法と共通の特質を持つものと言うことができる。

さらに、バンヴェニストは精神分析医の理解のプロセスについて次のように説明している。

〔話の〕内容は、患者が自分について行う状況の演出と、その状況内で彼が自分に割り当てられる位置とについて教えてくれるが、分析医は、この内容を通して、ある新しい内容、埋もれたコンプレックスから生じている無意識的動機づけという内容を探し求めるのである。ことばに内属する象徴系のむこうに、彼は、患者が述べる事柄と同じく、省略する事柄によって患者の知らぬ間におのずと構成されてくる、ある特定の象徴系を認める。そして、患者が自己を措定する身の上話の中に、分析医は動機づけを説明するもう一つの身の上話を浮かび上がらせる。すなわち彼は、話を、固有の規則と象徴と《統辞法》をもち、心理現象の深層構造に向かわせるもう一つの《ことば》の媒体と見なすのである<sup>27</sup>。

このプロセスからも、ウェーバーの理解的方法との同型性を認めることができる。「話」から見出される「固有の規則と象徴と《統治法》」とは、研究対象の行為の目的と手段の連関の集積から導かれる行為の一貫性と置き換えが可能である。この行為の一貫性との整合性に基づいて、行為の本来の目的、すなわち「動機づけ」を発見することができる。

このように理解的方法は、研究対象の《話》、すなわち個々の状況や文脈に応じてその都度生産されることばを捉え、同定し、ある種の測定を行うことを可能とする。バンヴェニストが今後の課題とした意味論の研究方法は、ある側面においては、「構造主義」が広まる以前にすでにウェーバーによってかなりの程度まで完成されていたということができよう。

一方で、バンヴェニストもまた、フロイトの精神分析を手がかりとして意味論の実際をここまで具体的に捉えていた点も、極めて興味深いことである。しかしながら、このような動機づけの解明は「ことば」の問題として集約して良いのだろうか。

バンヴェニストは「言語の記号学<sup>28</sup>」において次のように述べている。

——言語の内部でなされる分析においては、ディスクールという、表意作用の新たな次元を設定することによって。この次元を、意味論的意味と呼ぶことにしよう。これは記号に結びついた次元とは別ものである。この後者のほうは、記号論的意味である。

——狭い意味での言語学的対象を超えて、テキストや作品を分析する場合は、発話行為の意味論的意味に基づいてメタ意味論を構築し、それを練り上げることによって。

これらが「第二世代の」記号学となる<sup>29</sup>。

この場合、ウェーバーの理解的方法は「メタ意味論」に相当すると思われるが、これを記号学（言語学）、あるいは「ことば」の問題として捉えるべきかどうかは一考を要する。理解的方法において解明の対象となるのは、どのようなことばが用いられているかではなく、何を意図してことばが用いられたか、言い換えれば「動機づけ」そのものだからである。

ウェーバーとバンヴェニストの議論は、共にバンヴェニストの言うところの「構造主義」に基づく方法によって解明を行う「意味論」に属している一方で、解明する対象領域が異なっている。すばわち、両者の研究は異なる対象領域を形成しているということである。では、両者の対象領域同士の関係はお互いにどのように区分されるのだろうか。その点については、バンヴェニストにおける意味論の概念をより明確化したのちに改めて考察することにした。

### 3-2 記号論・意味論の関係を前提とした話（ディスコース）概念の検討のあり方

バンヴェニストにおける意味論の領域を明確化するために、先に紹介した意味論・記号論の分類が明確にできないという特徴を持ったいくつかの論稿を検討してみよう。まず、「代名詞の性質」の冒頭は以下のように始まっている。

どんな言語でも全て、代名詞を所有しており、しかもそれはどの言語においても、同じ表現範疇に関係するもの（人称代名詞、指示代名詞、など）として定義されている。これらの形とこれらの観念の普遍性から当然考えられるのは、代名詞の問題は、ことば *langage* の問題であると同時に言語 *langue* の問題であること、いなむしろそれがまずことばの問題であるからこそ、はじめて言語の問題でもあるのだ、ということである。筆者はここで、ことばの事実としてこの問題を設定し、代名詞が単一の類を構成するものではなく、ことば——代名詞はことばの記号である——の様相に応じて、相異なるいくつかの種をなすものであることを明らかにしたい。あるものは、当該言語の統辞論に所属しているが、他のものは、筆者が《話の現存 *instances de discours*》と名付けようとするもの、すなわち、離散的かつ一回限りであって、それによって話し手が当該言語を言として現働化する行為の特性を示しているのである<sup>30</sup>。

バンヴェニストは、代名詞には統辞論に属する記号論的な性質と、《話の現存》すなわち話し手の主観や状況に応じて変動する意味論に属する性質を合わせ持っている点を指摘する。代名詞について論じるということは、記号論と意味論が交わりあう接点、すなわち「関係」を前提にしているということに他ならない。では、意味の有無のみを問う記号論と意味そのものを問う意味論の接点は、どのように見出されるのであろうか。

バンヴェニストは代名詞の中でも特に人称代名詞について取り上げた「動詞における人称関係の構造<sup>31</sup>」という論稿の最終部分で、動詞人称の表現を二つの恒常的な相関関係にまとめている。ここでは検討に必要な一つ目に注目してみよう。

#### 1. 人称性の相関関係、わたし/あなたの人称を、かれの非＝人称に対立させる<sup>32</sup>。

バンヴェニストは、一人称、二人称、三人称は同列の区分ではなく、わたし/あなたという一人称、二人称に対して、かれという三人称が非＝人称として対立構造を持つことの論証を綿密に試みている。そして三人称の非＝人称としての性質を以下のような具体例を用いて説明する。

三人称は、正反対の価値をもつ二つの表現に用いることが可能である。かれ（またはかの女）は、目の前にいるだれかに向かって、その人を《あなた》の人称圏からそとに出そうとするときの話かけの形で用いられる。一つは敬意を表すものであって、（イタリア語やドイツ語において、《尊称》形として用いられる）儀礼の形として、話し相手を人称の条件、人間対人間の関係以上の物にもち上げるのである。もう一つは、軽蔑のあかしとして、《人称的》に話しかけるにさえ値しない相手を、卑しめるためである。《三人称》は、非＝人称形としてのその機能から、ある存在を人間よりもはるかに上のものに仕上げる尊敬の形にも、また人間としてはそれを空無化することのできる侮辱の形にもなるというこの適性を引き出している

のである<sup>33</sup>。

ここで例に挙げられているのは、三人称表現が用いられる際に生じることのある、主観性を伴う幾つかの判断であり、バンヴェニストの区分による意味論に属する議論として位置付けることができる。一方で、ここで論及された幾つかの判断の形態は三人称を用いる主体の意図を問わないため、行為における目的と手段の整合性や行為の一貫性については問うことができない。すなわち、ウェーバーにおける意味論の範疇にも含まれない現象であると言うことができる<sup>34</sup>。

ウェーバーの著作において、理解による説明が容易でない、あるいは理解における明証性<sup>35</sup>をほとんど持たない現象として挙げられているのは、精神病理学的現象、幼児の行動、記憶現象、知的な訓練現象である<sup>36</sup>が、ウェーバーの挙げた現象と三人称表現に由来する自覚の有無を問わない判断に共通しているのは、広く人間の認識に由来する現象であるという点である。一方、バンヴェニストが論じている後者だけに特異な点は、主観性をその基点としているという点である。

以上から、バンヴェニストにおける、記号論・意味論の関係を論じるための接点とは、ともに「主観的認識<sup>37</sup>」の解明を目的としていることであると言うことができる。

ここで挙げたいくつかの論稿においてバンヴェニストが論及している「主観的認識」は、社会や文化に固有な価値づけと結び付かずに、また、特定の状況や人間関係を想定したものでないものにも関わらず、どのような状況、文脈における話（ディスコース）にも共通し即応する性質を持っていると考えることができる。さらに言えば、バンヴェニストの論稿は話（ディスコース）の機能そのものに着目し、解明しているとも言うことができるであろう。「離散的かつ、つねに一回限り」「臨場の指向しかもたないものなかにいてしか同定されえない」「対話者相互の間のも<sup>38</sup>」とされる話（ディスコース）に一貫して存在する機能、そしてこのような機能をもたらす「主観的認識」の存在は、ウェーバーにおいては言及されておらず、また、これまでの我々の議論においても対象化していなかったものである。では、そのような対象はどこにおいて見出すことができるのであろうか。バンヴェニストの論稿「言語の構造と社会の構造<sup>39</sup>」には、の次のような一節がある。

言語は変化する社会の中で恒常性を保ち、多様化してやまない活動に一貫性を与えるものなのです。それは個別的多様性を通じて存在する同一性なのです。そして、ここから、個人に内在的でありながら、同時に社会をも超越するものとしての、言語の根本的に相矛盾する二重の性質が生じてきます。この二重性は、言語の全ての特質に繰り返し見出されるものです<sup>40</sup>。

言語の二重性はソシユールによって提示された根源的特徴であるが、バンヴェニストはそれを「主観的認識」の特徴としてとらえ直そうと試みたということができるのではないだろうか。バンヴェニストの議論はことばを前提としことばを対象とする。そして、主観性によって発せられ互いに通じ合うことが可能なことばが対象化できるということこそが、「個人に内在的でありながら、同時に社会を超越するもの」としての「主観的認識」の存在を証明していると言うことができるからである。

したがって、記号論・意味論の接点とは「主観的認識」の解明を目的としているということであり、そこにおいて論じられているのは「主観的認識」を前提とした話（ディスコース）の機能



の解明であると結論づけることができる。

### 3-3 バンヴェニストにおける「意味論」の対象領域の画定

以上の議論を総括してバンヴェニストにおける意味論の対象領域の画定を試みてみよう。

ウェーバーにおける意味論の研究目的は、研究対象の「動機づけ」、すなわち価値の解明である。個や集団の社会的行為、あるテキストや文学作品等形式を問わず、話（ディスクール）の「内容」そのものが検討の対象となる<sup>41</sup>。

一方、バンヴェニストにおける意味論の研究目的は、「主観的認識」を前提としたことばの解明、すなわち話（ディスクール）の「機能」の解明である。記号論との関係に基づいて論じられるバンヴェニストにおける意味論は価値づけ・意味づけが排除されることが前提となっているため、話（ディスクール）の内容や文脈を問わないが、同時にあらゆる話（ディスクール）にも共通し即応することが可能であると考えられることができる。

両者は同じ構造に基づいて意味を論じているという点で共通しているが、双方の研究領域は交わり合うことがない。例えば、バンヴェニストが解明する「主観的認識」は主観性を伴う行為でありながら目的を問うことができない。一方、文や語彙のレベルであればそれらを用いる意図を問うことができる。しかし、自分のことばがどのような統辞に従うかという点は選択の余地がないため、ウェーバーにおける意味論によっては解明することができない。逆もまた同じで、価値づけ・意味づけの排除を前提とするバンヴェニストにおける意味論は、ウェーバーのように価値を論じることができない。第一章で指摘した問題に即していえば、バンヴェニストの提案した「意味論」の定義は、「価値」の解明と「主観的認識」の解明を明確に区分することなく、どちらも「ことば」の問題としていた点に問題があったと言うことができる。ここから、我々は「価値」の解明を目的とする領域を「価値論」、「主観的認識」の解明を目的とする領域を「意味論」として区分し、新たに位置づけることにしたい。

## 4. 関係連動型理解的方法の提案

### 4-1 関係を前提とする行為における「主観的認識」の存在

ここまで意味論の開拓のあり方、そして、相互的・流動的に変化していく話（ディスクール）概念をどのように捉え解明していくかを中心に論を進めてきたが、そもそもの目的は、相手との関係に応じて変動していく行為を解明するための方法を明らかにすることにあった。バンヴェニストは言語学者であるため、前提とする関係は記号論・意味論の一对のみであり、検討する対象はことばに限られている。ところで、「主観的認識」に関して、記号論・意味論という関係以外に基づいて論じている先行研究は存在するであろうか。

これまでのところ、個別的・個体的でありながらあらゆる状況や文脈に即応する「主観的認識」の存在をバンヴェニスト以上に的確に解明している先行研究は管見によれば存在しない。けれども、近いものとしては、アダム・スミスの『道徳感情論<sup>42</sup>』を挙げることができるであろう。

『道徳感情論』は『国富論』に並ぶスミスの代表作であり、人間のあらゆる判断や行為がどのような動機によってなされるのかを、行為の適否の感覚、価値と害悪の感覚、慣習や流行、共感、

道徳、倫理といった多彩な方面から論じている。

経済学者アマルティア・センはスミスの『道徳感情論』について次のように述べている。

スミスは非常な説得力をもって、何が正しく何が誤りかの「最初の知覚」は「直接的な感情と感覚の対象であって、理性の対象とはなり得ない」とも主張している。最初の知覚がきびしい吟味を経て変わることはあるとしても（スミスもそれは認めている）、やはり性質や感情の傾向について興味深い手がかりを与えてくれる。（中略）スミスの道徳や政治に対する姿勢がきわめて包括的でグローバルな性格を備えていることは、すでに論じたとおりであるが、ここではさらに、スミスの倫理面の包括性が、あらゆる人間は基本的に似通っているという傾向とよく調和していることを付け加えておきたい。スミスが階級、ジェンダー、人種、国籍の壁を軽々と飛び越えて人間の潜在能力は等しいとみなし、天与の才能や能力に本質的な差異を認めなかったことは注目に値する<sup>43</sup>。

アマルティア・センの指摘する「スミスの倫理面の包括性」は、本稿で検討した「主観的認識」と似通った性質を持っている。ウェーバーが価値の解明に際して手がかりとするのは目的合理的行動、すなわち、目的と手段の連関が合理性において明晰に理解される部分であるが、これは「理性の対象」と言って差し支えないだろう。一方、「感情や感覚」は「主観的認識」に属するものと言える。そして、「主観的認識」もまたスミスと同じように、人間の特質から切り離すことができないということばの存在を証左として、「あらゆる人間は基本的に似通っている」という仮説を認めるものである。

さらに興味深いことに『道徳感情論』の冒頭は次の一節から始まっている。

#### 共感について

人間というものをどれほど利己的とみなすとしても、なおその生まれ持った性質の中には他の人のことを心に懸けずにはいられない何らかの働きがあり、他人の幸福を目にする快さ以外に何も得るものがなくとも、その人たちの幸福を自分にとってなくてはならないと感じさせる。他人の不幸を目にしたり、状況を生々しく聞き知ったりしたときに感じる憐憫や同情も、同じ種類のものである<sup>44</sup>。

スミスが人間の「生まれ持った性質」として最初に挙げている「共感」であるが、奥田正造における相互的主観性もまた、相互の「共感性」においてもたらされていることを、我々は前稿<sup>45</sup>に基づいて確認することができる。18世紀イギリスの道徳哲学者アダム・スミスと明治末期に成蹊女学校で校長を勤めた仏教徒奥田正造という全く接点がないと思われる二人に見られる思想の共通性は「主観的認識」として理解することが可能である。したがって、記号論だけでなく二人以上の価値観・立場の異なる対象からも「主観的認識」を見出すことが可能であると言うことができる。

また、バンヴェニストの場合、記号論・意味論の関係において見出されたのが「主観的認識」であったが、アダム・スミスと奥田正造の場合、「主観的認識」を接点として双方の関係が新しく見出されるに至っている。言い換えれば、関係を前提とする行為は二人以上の研究対象の間にもどのような「主観的認識」が機能しているかを理解することによっても解明することができるので

はないだろうか。

これまで、アダム・スミスの場合は倫理学や道徳哲学の領域において、奥田正造の場合には宗教学や教育学の領域において、双方の思想を別々の「価値」の提案として見なし、それぞれの独自性を解明しようとしてきた。一方、「主観的認識」として捉え直した場合、両者の思想は「価値」の提案としてではなく、双方の思想を「主観的認識」における開かれた「仮説」として捉え直すことが可能になる。「価値」の提案であればその諾否をめぐって各々が判断を迫られるということになるはずであるが、「仮説」であれば、それぞれの論拠を開かれた場において流動的かつ多元的に精査し合い、その妥当性を問い続けることが可能になるはずである。このような点で「主観的認識」としての人間の行為の解明という問題構成は、教育行為に対しても、その新たな側面に光を当てることになる。すなわち、新たな研究領域を切り開くための十分な方法的射程を持っているとすることができるであろう。

#### 4-2 「主観的認識」の解明を目指して

それでは、「主観的認識」はどのように解明することが可能であろうか。先に検討した奥田正造とアダム・スミスの例を参照すると、「主観的認識」の解明にあたっては次の三つの方法を想定することができる。

1. 関係を前提とした行為の解明によって
2. 「主観的認識」を解明していると思われる先行研究の検討によって
3. 「主観的認識」を前提としていると思われる先行研究の検討によって

1についてであるが、ウェーバーは、個々が選択する価値観は、最終的には調整や妥協が不可能であり、対立する価値観は永遠なる神々の闘争を続けると指摘している<sup>46</sup>。一方、日常生活においては、価値の対立する者同士が共通する課題に取り組む際に自分の判断の調整や妥協をしたり、説得によって相手の判断を変えるよう促したりすることは当たり前に行われている。例えば、奥田正造についての論稿では奥田に対して堂々と反抗的な態度をとった女生徒に対して奥田が「共感性」を認めたという事例に着目したが、「共感性」を「主観的認識」の一形態として捉え直してみると、説得や納得に応じた判断の変更はお互いが共有可能な「主観的認識」に基づいてなされているのではないかと考えることができる。また、奥田正造についてこれまで見て来たように、「主観的認識」は一貫した恒常性や普遍性を含むため、理解的方法によって捉えることが可能である。理解的方法によって、関係を前提として相互的・流動的に変化する個々の行為の中に存在する「主観的認識」の一貫性を捉え、理念型として構築することが第一の方法として挙げられる。

続いて、2についてであるが、多種多様な先行研究の中にはアダム・スミスの『道徳感情論』のように「主観的認識」の解明を目的とした研究として位置付けられる可能性のあるものがいくつか存在する。それらは興味深いことに、学問領域や時代、人種、身分を超えて共通する内容を持っている。例えば、奥田正造とアダム・スミスの思想に共通性が見られたのと同じような形で、奥田正造の女子教育に対する理念と古代ギリシャの哲学者クセノフォンの著作『オイノミコス<sup>47</sup>』に論じられた配偶者に対する教育のあり方は奇妙に思えるほど共通点が多い<sup>48</sup>。1に加えて、学問領域や時代、文化を超えて共通する「主観的認識」を抽出していくことで、理念型の精度や整合性を高めていくことができるだろう。

最後に3についてであるが、マックス・ウェーバーとバンヴェニストには共に「構造主義」として同定することのできる方法を用いているということの他に、重要と考えられる共通点がある。それは双方ともに、全ての研究、認識、行為は主観性を前提としていることを明言しているということである<sup>49</sup>。「主観的認識」について論じているバンヴェニストの議論が「価値」を前提としていないことはすでに指摘してあるが、ウェーバーについては対照的に、「価値」を前提とした上で「主観的認識」について論じた議論であると言うことができる。また、バンヴェニストと親密な交友関係を持っていたロラン・バルトについても、この問題に関連する言説の多くがバンヴェニストに依拠しているのを見ることができる。因みにバルトは、テキストの解釈において相互性や流動性が保たれている状態こそ最も快樂が強いという「価値」の提案を行っている<sup>50</sup>。このように、「主観的認識」をめぐって議論を展開しているのとらえ直すことのできる研究や言説を参照することも、「主観的認識」の理念型を構築する上で大きな一助となることだろう。

#### 4-3 関係連動型理解的方法の提案

はじめに提起したウェーバーの理解的方法の限界は、関係の相互性・流動性に依拠して変容する行為を解明できない点にあった。例えば、奥田正造は生徒の自発性や状況を主導する主体性を害する恐れのある娯楽や、家庭を経営する上で必要性の生じない勉学を否定していたが、下働きをしながら浪曲を歌う女子生徒や大学進学を志す女子生徒を認め、場合によってはむしろ高く評価していた。ウェーバーの理解的方法をこれらの事例に適用すると、奥田の行為は価値観の一貫性を損なう過失や例外としてしか理解することができない。

一方、「主観的認識」に基づく方法において捉えた場合、奥田の意向に沿わないことを知りながら積極的かつ奥田を説得するような形であえて生徒達がとった振る舞いは、奥田が育てたいと考えている自発性や主導性が強く発揮されており、そこに奥田の判断の一貫性を読み取ることができるが、そのような判断がどのような価値観に基づいて下されているのかという点については、焦点を当てて論じることが困難である。

そこで、本稿では、このような関係を前提とする行為の解明に当たって、「価値論」と「意味論」の領域を連動させた関係連動型理解的方法を新たに提案することにしたい。先に触れたように、価値論と意味論は構造を同じくしているが、交わり合うことのない別個の領域に属している。双方の欠陥を補い合うように、「価値」の解明と「主観的認識」の解明を連動させて対象の行為を総合的に捉えることを可能とするのが関係連動型理解的方法となる。

奥田正造の場合、女性は娯楽や勉学を嗜むべきではないという当時の時代背景を反映した価値観は、現代においては時代遅れであり、極めて女性差別的であると意味づけられ得る。しかし、関係連動型理解的方法を適用すると、そのような価値観を持つはずの奥田が、老若男女を問わず対等かつ誠実に向かい合い、直接関わりがあった人々から長く慕われているのは、相互性・流動性を維持することが前提となる「主観的認識」を相手との一回性の関係に依拠して創造的に発揮し、適切に行為するということが一貫して行われていたためであろうと推測することができる。また、奥田の行為のあり方は、はじめに提起した能動的主体性の特質に合致するということもできるだろう。すなわち、価値論と意味論の両方に基づく行為は多義的で限定が難しく蓄積されづらい。また、関係を前提として変容していくため、その行為を意図の一貫性のみで還元することができないという特質である。

このような捉え難い奥田の行為の特質は、大村はまと対置すると、忘れられやすく誤解されや

すい、また軽んじられやすいといった傾向が特に目に付くのであるが、興味深いことに、このような傾向は先に取り上げたクセノフォン、アダム・スミスにも同様に見ることができる。古来より「神のごとき」と称えられ、現在においても西洋哲学の基本的な典拠とされているプラトンに対して、古代における際立って高い評価はいつの間にか忘れられ、現在では卑近で低俗なことばかり論じていると評されるクセノフォン<sup>51</sup>、人間の利己的経済行為を肯定する「神の見えざる手」の理論として現在でも経済学の古典として広く参照されているアダム・スミスの『国富論』に対して、彼自身が一生心血を注いだとされる名著であるにもかかわらず、一般には殆ど評価されることのない『道徳感情論』<sup>52</sup>というように、同様とも思える対立の構図を見ることができる。大村はまと奥田正造の対立からは、関係を固定化し相互性や流動性を阻害する指向性を持つ受動的主体性に対して、関係に応じて見出される「主観的認識」を創造的に発見することで相互性や流動性を維持し続けようとする能動的主体性という対比が見出されたが、プラトンとクセノフォン、あるいは『国富論』と『道徳感情論』の評価のあり方においても、同様の対比を見出すことができるはずである。以上から、関係連動型理解の方法は、関係を前提とする行為の解明を可能とするとともに、能動的主体性の解明にも寄与する可能性を指摘することができるであろう。

#### 注

- <sup>1</sup> 新妻千紘、「奥田正造による寓話「仏様の指」の真意——報告者大村はまとの主体性のあり方の違いを手がかりにして」『埼玉大学紀要 第70巻第2号』埼玉大学教育学部 p 2021年
- <sup>2</sup> ・新妻千紘・戸田功「大村はま「国語科単元学習」における基底的価値観：大村はま「国語科単元学習」の理念型構築の第一段階として」『埼玉大学紀要 第69巻第1号』、埼玉大学教育学部、p13-32、2020年  
 ・新妻千紘・戸田功「大村はま「国語科単元学習」における教育観：大村はま「国語科単元学習」の理念型構築の第二段階として」『埼玉大学紀要 第69巻第1号』、埼玉大学教育学部、p33-63、2020年  
 ・新妻千紘・戸田功「大村はま「国語科単元学習」における発展形態：大村はま「国語科単元学習」の理念型構築の第三段階として」『埼玉大学紀要 第69巻第2号』、埼玉大学教育学部、p - 、2020年
- <sup>3</sup> 新妻千紘・戸田功「個の教育行為を解明するための理解の方法の提案：大村はま「国語科単元学習」に着目して」『埼玉大学紀要 第68巻第1号』、埼玉大学教育学部、p19-34、2019年
- <sup>4</sup> 代表的なものとしては、John Hattie の“V I S I B L E L E R N I N G ; A Synthesis of Over 800 Meta-Analyses Relating to Achievement”を挙げることができる (Authorised translation from English language edition published by Routledge, a member of the Taylor & Francis Group. 邦訳書：『教育の効果 メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化』記者：山森光陽、図書文化、2018年)。本書では、「800を超えるメタ分析と、多岐にわたる分析結果を単一の連続尺度上に配列する方法」(邦訳書：p 35)によって、数々の学力を上げる要因、あるいは下げる要因を「効果量」として数値で提示している。例えば、宿題を取り入れることに対する  $d=0.29$  という効果量は「学校で宿題を出すことは100回中58回肯定的な差をもたらす、または宿題を課さない生徒と比べて58%の生徒は成績が高まるといえる」(p 37)とされている。個や関係を捨象したエビデンスとして提示された数値ではあるが、本書には、「効果量が低いことは必ずしも「実施すべきではない」ということを意味しない」(p 16)「本書で示された効果量は決定的なものではない」「効果そのものも変えられる」(p20-21)との記述もあり、教師個人の実践知や経験知と効果量もたらす知見との実質的な違いはほとんど見出されないと考えることができる。ちなみに、本書の出版部数は3万部以上、ドイツ語、スウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語、中国語に翻訳されている (p 13)。
- <sup>5</sup> 言語 (langue ラング) は、全ての人に共通な言葉の体系を意味する。中国語、英語等の各国語や文法体系等が「言語」に分類される。ことば (langage ランゲージュ) は、一般的な「言葉」という概念全般を指し示す。言 (parole パロール) は、個人によって「言語」が現働化され「個人的かつ主体感的な目的」(後掲書7 p 86)に従属した状態、話 (discours ディスクール) は、対話者相互の間で行う行為として機能し、後に説明するように離散的で臨場的な指向を持つことばの状態を意味する。  
 バンヴェニストの著作を手がかりに概略的な説明を試みたが、これらの用語は本書で特に定義の説明はされておらず、上記はそれぞれの論稿で用語が使用される文脈から意味を推測したものである。これらのタームはソシュール、ラカン、フーコーなども用いているがそれぞれの意味や用法は微妙に異なっており、どの程度まで定義が共有されているのかは不明である。本稿で用いるこれらのタームは全てバンヴェニストに依拠したものである。
- <sup>6</sup> “discours” は、話(わ)、あるいはディスクールと訳出されるが、「話」は、「話す」「話 (はなし)」といった

別の読みや文章語に紛れやすく、「ディスクール」は用語から意味を取りにくいいため本文では話（ディスクール）と表記することにした。

<sup>7</sup> Émile Benveniste “PROBLÈMES DE LINGUISTIQUE GÉNÉRALE” Éditions Gallimard, Paris, 1966. 邦訳書：「一般言語学の諸問題」訳者：河村正夫、木下光一、高塚洋太郎、花輪光、矢島猷三 共訳、みすず書房、1983年、p 234

<sup>8</sup> 同書 p246

<sup>9</sup> 同書 p242

<sup>10</sup> 同書 p3-19

<sup>11</sup> 同書 p5

<sup>12</sup> 同書 p12

引用部分の「ここ」「上記の方法」は、バンヴェニストが「近年の主流を占める研究」として例に挙げた、ハリス Z. S. Harris の研究を指している。

<sup>13</sup> 同書 p14

<sup>14</sup> Émile Benveniste “PROBLÈMES DE LINGUISTIQUE GÉNÉRALE II” Éditions Gallimard, 1974. 邦訳書：『言葉と主体 — 一般言語学の諸問題一』監訳：阿部宏 訳：前島和也、川島浩一郎、岩波書店、2013年、p3-22(「構造主義と言語学」)

<sup>15</sup> 同書 p14

<sup>16</sup> 同書 p19

<sup>17</sup> 同書 p 59-60

<sup>18</sup> 前掲書7に収録されている。

<sup>19</sup> 前掲書14 p15

<sup>20</sup> 前掲書7 p99-107 「言語学における《構造》」を参照

<sup>21</sup> 「構造主義」は曲解されることが多く語義の氾濫が著しいため非常に限定しづらい用語となっていることをバンヴェニスト自身も指摘している(「わたしのように早い時期から構造主義的な関心をもっていた研究者は、構造主義が曲解されていることにも、この学説が言語学では時代遅れとなり始めた時になってようやく他の分野で流行し始めたことにも、驚きを感じたものでした。」前掲書14 p8)が、本項における「構造」、あるいは「構造主義」とは、「構造」を認識のための方法として設定する研究方法上の立場であり、具体的には、バンヴェニスト、及びレヴィ＝ストロースにおける用法に依拠して用いることとする。

ちなみに、バンヴェニストは構造主義に関する用語の劣化の原因について次のように述べている。

これらの原理(著者注※構造主義を指す)を社会的な概念にまで広げて適用すると、はるかに具体性のある概念に向き合うこととなります。[a] や [é] ではなく、男性/女性、王様/従僕という対立が問題となります。データが豊富ですぐに集まるだけでなく、そこには言語の枠内で考察された事実にはないような扱いやすさもあるのです。このことは、構造という呼称が、それが生まれた現実とは別の現実に適用された時から、関係する諸概念に品質低下がおこったという現象をおそらく説明しているでしょう。(前掲書14 p10)

<sup>22</sup> 前掲書14 p26

<sup>23</sup> Max Weber: SOZIOLOGISCHE GRUNDBEGRIFFE, 1922, 邦訳書：『社会学の根本概念』訳者：清水幾太郎、岩波書店、1972年、p10

<sup>24</sup> 前掲書3

<sup>25</sup> 前掲書7 p83-96

<sup>26</sup> 同書 p84

<sup>27</sup> 同書 p86

<sup>28</sup> 前掲書14 p39-65

<sup>29</sup> 同書 p60

<sup>30</sup> 前掲書7 p234

<sup>31</sup> 同書 p203-216

<sup>32</sup> 同書 p215

<sup>33</sup> 同書 p210

<sup>34</sup> ちなみに、バンヴェニストが挙げた動詞人称の表現の2つ目の相関関係は以下の通りである。

2. 主体性の相関関係、前者の内部(著者注※一つ目の相関関係を指す)にあって、わたしをあなたに対立させる。単数と複数との通常の区別は、人称の領域においては、厳密な人称(=《単数》)と拡大された人称(=《複数》)の区別に置き換えられないまでも、少なくともそのように解釈されねばならない。ただ《三人称》のみが、非=人称であることによって、真の複数を受容する。

バンヴェニストは上記について、「大多数の言語において、代名詞の複数は、少なくとも一般に見うけられるかぎりでは、名詞の複数と一致しない」と述べている。すなわち、《わたしたち》は《わたし》が複数存在することを意味せず、《わたしたち》は《わたし+あなたがた》、あるいは《わたし+かれら》のいずれかとして用いられる。そして、特に印欧語のような《わたし》の優越性が極めて強く、複数化が単数の代わりを務める

ほど分化されていない《わたしたち》は、「一段とかさの大きい、荘厳な、しかし限定の少ない人称に拡大される」ことで尊称の意味を持つ場合と、「《わたし》のくだすあまりにも鮮明な断定がぼかされ、よりゆるやかで、かどのとれた表現となる」場合があるとバンヴェニストは述べている。

上記も本稿で挙げた例と同様に、動詞人称の複数化を使用する意図や目的を主体に還元することが難しく、個別のかつ一回性の強い状況でありながらどのような文脈や状況にも即応するウェーバーの理解的方法の範疇に含まれない行為である。このような統辞論に基づく特殊な主観的判断についての言及は前掲書7に多く論じられている。

<sup>35</sup> 「明証性」はドイツ語“Evidenz”の訳語である。注23の引用では「明確性」と翻訳されているが同じ語を指している。

<sup>36</sup> Max Weber: ÜBER EINIGE KATEGORIEN DER VERSTEHENDEN SOZIOLOGIE, 1913, 邦訳書:『理解社会学のカテゴリー』訳者:林道義、岩波書店、1968年、p14

<sup>37</sup> 未解明であったバンヴェニストが解明した部分を先ほどは「主観性を伴う幾つかの判断」と表現したが、厳密にはこのように「主観的認識」と表現する方がふさわしいと言えるだろう。「フロイトの発見におけることばの機能の考察」の引用においても明らかであるが、ウェーバーの理解的方法は判断や行為の自覚の有無を問わず解明することが可能であるが、研究対象が自らの判断や行為の根拠に自覚的である方が解明は遥かに容易であり、自覚の有無は解明の重要な要因となる。一方、バンヴェニストが解明していると思われる「主観的認識」は、解明に当たって研究対象の自覚の有無は全くと言っていいほど問題にならない。このように、本稿では研究対象の解明にあたって行為者の自覚の有無が問われるか否かという点において「判断」と「認識」を区別している。

<sup>38</sup> 注7,8,9を参照

<sup>39</sup> 前掲書14 p93-104

<sup>40</sup> 同書 p96

<sup>41</sup> 「ディスクール」は通常「話されたもの」を意味し、何度も読み返し反芻することのできるテキスト、すなわち書き言葉を含まない。バンヴェニストの論稿においても同様に基本的にディスクールは話し言葉を指すものと思われ、ディスクールが書き言葉を含むという直接の言及は見当たらない。しかし、バンヴェニストは「意味論的意味は必然的に指示対象の総体を引き受ける」と述べており、書き言葉を解明する場合の指示対象は書き言葉を書いた主体と書き言葉を読む主体の双方が含まれることになる。普遍的な事実として、書かれた言葉自体が変容することがなくとも読む主体が変われば、内容の理解や解釈が違ってしまふことは往々にしてある。また、読む主体が同じであっても解釈や内容の理解の程度が変わることもあるだろう。そのような意味で、書き言葉についても「離散的かつ、つねに一回限り」「臨場の指向しかもたないものなかにおいてしか同定されえない」「対話者相互の間のも」というディスクールの機能を同様に認めることができる。書き言葉とそれを読む読者の間に生じる相互性・流動性についてはロラン・バルトが言及しており、その点については二本の論稿、「〈周縁的読書活動〉における「個体」的あり方について——『バーナード嬢曰く。』に見るテキストの快楽」（新妻千紘、『埼玉大学 国語教育論叢 第二十二号』埼玉大学国語教育学会、2019年、p13-27）「ロラン・バルトにおける「読者の死」について——アニメミライ 2012『わすれなぐも』に見られる主体の〈欠在〉について」（新妻千紘、『埼玉大学 国語教育論叢 第二十三号』埼玉大学国語教育学会、2020年、p11-26）で論じている。この二つの論稿と本稿を踏まえて、書き言葉におけるディスクール機能については別に詳細に論じる必要があるだろう。

<sup>42</sup> Adam Smith, “The Theory of Moral Sentiments” 1790. 邦訳書『道徳感情論』訳者:村井章子、北川知子、日経BPクラシックス、2014年。

<sup>43</sup> 同書 P 27 「アマルティア・センによる序文」より

<sup>44</sup> 同書 p57

<sup>45</sup> 前掲書1参照

<sup>46</sup> Max Weber, “WISSENSCHAFT ALS BERUF”, 1919. 邦訳書:『職業としての学問』訳者:尾高邦雄、岩波書店、1993年、p63.

<sup>47</sup>  $\Xi \epsilon \nu \omicron \phi \acute{\omega} \nu$  “Οἰκονομικός” 邦訳書:『オイコノモコス 家政について』訳者:越前谷悦子、リール出版、2010年。

<sup>48</sup> まず、クセノフォン・奥田正造の両者ともに男尊女卑の時代にあつて、女性と男性を対等な存在として論じている点が非常に珍しい。また、家政を題材としていること、家政における女性の役割や身の処し方について自発性・主導性がともに重要視されている点も共通性として挙げる事ができる。両者の共通性については稿を改めて詳細に論じる必要があるだろう。

<sup>49</sup> Max Weber: Die Objektivität des sozialwissenschaftlichen und sozial-politischen Erkenntnis, Gesammelte Aufsätze zur wissenschaftslehre(Tübingen: J.C.B.Mohr, 1922), SS.146-214 邦訳書:徳永洵訳、「社会科学および社会政策的認識の『客観性』」、『現代社会学大系5 ウェーバー 社会学論集』青木書店、1971年。及び、前掲書7「ことばにおける主体性について」(p242-252)を参照

<sup>50</sup> 注41に挙げた論稿を参照

<sup>51</sup> ディオゲネス・ラエルティオス著『ギリシア哲学者列伝』（訳者：加来彰俊、岩波書店、1984年）においてクセノフォンはソクラテスの弟子として最初に名前を挙げられ、「ソクラテスに憧れてその忠実な模倣者たろうとしていた」人物であり、「その教養によってギリシア人の事績を示した上でソクラテスの知恵がどんなに美しいものであったかを思い起こさせた」と評価されている（p163, p165）。しかし、現在ではほとんど名を知られてない上に、プラトンと比較すると忠実な弟子ではない、ソクラテスと過ごした時間が短い、プラトンに比べるとソクラテスの影響が少ないといった不当とも言えるほど低い評価がなされている。プラトンとクセノフォンはほぼ同年齢とみなされており両者共にソクラテスと過ごした時間はソクラテスの晩年に限られているため、これらの評価にはさしたる根拠もなく『ギリシア哲学者列伝』の著述を無視するものであるが、クセノフォンがプラトンより遥かに劣るという評価は現代の西洋古典学の憂うべき通説となっている。

<sup>52</sup> 注 43 を参照

(2021年3月31日提出)

(2021年5月14日受理)